

# ZOCALO 2023 10 ▶ 11

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

## イン・ビトウィーン

企画展「イン・ビトウィーン」

2023年10月14日(土)～2024年1月28日(日)

虚構と現実、国境、ジェンダーなど、世界には、目に見える、あるいは目に見えない多くの境界があります。境界の存在は、世界を分断する障壁となることもあれば、自分の居場所を守るための拠りどころになることもあるでしょう。過去から現在まで、多くの作家がこうした多様な境界のあり様に着目し、作品を通して浮かび上がらせようとしてきました。また、境界に立つ当事者としての自身のアイデンティティに向き合い、制作を続けた作家も少なくありません。本展覧会は、こうした視点から、近年当館の収蔵作家となった早瀬龍江(はやせ たつえ)、ジョナス・メカス、林芳史(はやし よしふみ)に、ゲストアーティストとして潘逸舟(はん いしゆ)を加えた4人の作家を紹介します。

早瀬龍江(1905-1991)は、北海道の奥尻島に生まれ、女子英学塾(現・津田塾大学)在学中、洋画家・横井弘三の指導を受けて絵画制作を始めました。その後、福沢一郎が主宰する絵画研究所で学び、シュルレアリスム絵画を手がけるようになります。独立美術展や美術文化展に発表した早瀬は、1943年、夫・白木正一とともに現在の埼玉県飯能市に移りました。

早瀬の作品は、パンや魚、ガラス瓶といった日用品や自身の頭部、女性の裸体などのモチーフを大きく歪めたり接ぎ合わせたりすることで、現実離れた風景を日常の奥底から立ち上がらせています。シュルレアリスムから抽象へと、新たな表現の展開を模索しつつあった1958年、美術文化協会の内紛などが契機となって、早瀬は白木とともにニューヨークに渡ります。約30年間暮らしたニューヨークでは、油彩画だけでなく、陶芸やテキスタイルを用いた立体、ブラックライトで発光する絵画に挑戦するなど、晩年まで意欲的な制作を続けました。



早瀬龍江《願望》1953年  
埼玉県立近代美術館蔵

リトアニア出身のジョナス・メカス(1922-2019)は、映像作家、詩人、映画批評家、映画保存の活動家など多彩な顔を持ち、近

年も映画館や映像祭で作品が上映される機会が多い作家です。難民キャンプを転々とした後1949年にアメリカへ亡命したメカスは、16ミリフィルムカメラを使って日記を綴るように家族や友人、日常の光景を撮り始めました。

メカスの作品は、鑑賞者自身の個人的な記憶を喚起させるような詩的で親密なものでありながら、同時に、社会や歴史に対する作家自身の強い視線を感じさせます。それは、フルクサスやアンディ・ウォーホルなどが活動し、前衛芸術がまさに生まれる瞬間を捉えた作品の同時代性に加えて、ジャーナリストや詩人としてリトアニア語で言葉を紡いでいたメカスが、亡命直後、自身のアイデンティティでもある言語の代わりとして映像の撮影を始めたという背景とも無関係ではないでしょう。本展では、フィルムから選ばれたイメージがプリントされた版画や写真作品に加え、自伝的要素も含む晩年の重要作「幸せな人生からの拾遺集」(2012年)などの映像作品を上映します。



ジョナス・メカス「幸せな人生からの拾遺集」より  
2012年  
©Jonas Mekas, courtesy of Re:Voir

林芳史(1943-2001)は、在日韓国人二世として大阪に生まれました。早稲田大学在学中から哲学や現代思想に傾倒した林は、1970年代半ば、ものの「実体」と自分が見ている「認識」との間に生じるずれについて考察を深め、版画によるミニマルな表現や、日用品を写し取るフロッターージュに取り組みました。次第に東洋思想や水墨画の影響を受けるようになり、筆のストロークや墨の滲みによって生まれる多彩なニュアンスを理知的に探究した水墨の抽象作品や、墨の質感を版画で表現した作品を手がけ、国内やフランスの展覧会で発表しました。

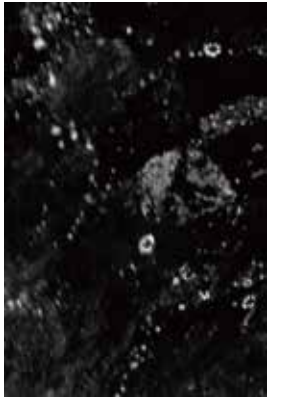


林芳史《習作》1975年頃  
埼玉県立近代美術館蔵

一方、林は、美術評論家や文筆家としても多くの仕事を残しています。1960年代より、郭仁植や伊丹潤ら韓国をルーツとする作家や、静岡を拠点にした鈴木慶則や杉山邦彦、そして関根伸夫ら「もの派」の作家たちとの交流を深め、彼らの制作を理論的な側面から支えました。

中国・上海出身の潘逸舟(1987年生まれ)は、幼少時に青森に移住し、現在は東京を拠点に活動しています。潘は、社会と個の関係の中で生じる戸惑いやアイデンティティの揺らぎに関心を持ち、自身の身体を用いたパフォーマンスや映像、インスタレーションによって表現してきました。

2022年、潘はアーティスト・イン・レジデンスに参加するためコロナ禍の中国を訪れ、上海のホテルで数週間の隔離生活を体験しました。本展では、ホテルの窓ガラスに付着した塵や埃を顕微鏡カメラで撮影した映像を中心に構成される新作インスタレーションを通して、自分と他者の間にある目に見えない境界とはどのようなものかという問いを提示します。リサーチをもとに社会や歴史、文化的事象を観察し、自身の身体的な経験と重ね合わせるようにして制作される潘の作品は、早瀬、メカス、林が投げかける視点を、今日の私たちへと接続してくれるはずです。



潘逸舟《家を見つめる窓》  
2023年、作家蔵

本展の4名の出品作家はそれぞれ活動の年代や領域が異なりますが、自らのアイデンティティに対する深い洞察が制作の出発点になっている点では、時代を超えて多くの視点を私たちと共有できるように思われます。展覧会は、作家ごとのセクションを設け、4つの小さな個展が連なるように構成されます。絵画、版画、ドローイング、映像などそれぞれのメディアを用いた試みを重ね、他者との境界やアイデンティティについて思索を続けた各作家の足跡を、作品や資料、関連作家の作品を交えながらたどる機会となれば幸いです。(S.H.)

## 永井天陽 遠回りの近景

アーティスト・プロジェクト#2.07 永井天陽

2023年10月14日(土)～2024年1月28日(日)

現在活躍しているアーティストを紹介する「アーティスト・プロジェクト#2.0」(以下A.P.)。2023年度は彫刻家の永井天陽さんを迎えます。制作中の永井さんにお話を伺いました。

—「metaraction」シリーズの新作を展示予定と伺っています。

はい。これは既製品から型を取って透明性のあるアクリルに置き換え、その中に別の既製品を詰め込んだシリーズです。metaraction(メタラクション)はメタとインタラクションを掛け合わせた造語で、より複雑な相互作用を意味しています。新作として、これまであまり作れていなかった大型の作品を複数点制作しています。

—「metaraction #31 P-1」では外側が招き猫で内側がウサギのぬいぐるみですね。

外側と内側で重なる部分ができるような組み合わせにしているんです。例えば目や鼻の部分が重なって、鑑賞者がどちらを見ているかわからなくなるような。単に「Aの中にBが入っている」で完結させるのではなく、ところどころ内側をはみ出させることで関係が逆転する要素を入れて、違和感が生まれるように作っています。



《metaraction #31 P-1》2023年  
撮影:赤羽佑樹

—「違和感」は永井さんの制作の重要なキーワードになっています。

「metaraction」の制作を始めたのも骨壺を見たときの違和感がきっかけでした。そっけない壺であり、故人であり、そしてその二つが合わさった全く新しいものである目の前の存在を何と呼べばいいのかわからず、深い混乱を経験しました。

ほかにも「どうやって息をしてるんだろう?」とか考える瞬間が誰しもあると思うんです。私がやっていることは、そういう日常のちょっとした「なんだろう?」というポイントをピックアップして、別の形に置き換えて表現するようなことだと思っています。

—A.P.はどんな展示にしたいですか。

「metaraction」を手掛けてちょうど今年で10年目になるのですが、一つの作風で自身のイメージを固定したくない思いがあり、個展のたびに試行錯誤しながら新しい表現を取り入れてきました。ただ、今はこれまで取り組んできた表現を一度立ち止まって見てみたい気持ちがあります。既存の作品を再制作したり、その続きを考えたり、別の素材で置き換えてみたり…と、引き出しを再度開けて中のものを確認し、パズルのピースを組み変えていくような感覚で制作を進めています。

A.P.では「metaraction」を主軸としながら、素材や見た目の異なる他の作品を加えて展示したいと考えています。それらが同じ空間に存在することで新たな違和感が発生するのでは…と、自分自身がそんな空間を見てみたいワクワクした気持ちがあります。

また、「鳥籠のよう」と例えられたり、建築の内側と外側がところどころ交差するような特徴のある黒川紀章設計の美術館空間

と、自身の作品の成り立ちに通ずるものを感じています。展示室だけでなく、センターホールやエントランスにも作品を設置する予定です。

—「遠回りの近景」という展覧会タイトルにはどんな意味を込めていますか。

遠回りして近景を見るときも捉えられるし、もしくは遠回りした先の別アングルから見える近景、そもそも近くに遠回りするのは?…といった具合に、矛盾や複数の受け取り方ができる言葉の組み立てを意識しています。

また、身近な違和感に対して、最短距離で真正面から1つの答えを出すのではなく、別の視点やルートから探索し答えらしきものを見つける、そんな制作自体を表すような解釈も込めています。芸術とは遠回りの方法を考え多様な視点から世界を見ること、幾通りもの世界の在り方を垣間見せてくれるものだと信じています。(聞き手: S.A.)



《Urnto 21-23》2021年  
撮影:赤羽佑樹

永井天陽(ながい・そらや)

1991年埼玉県飯能市出身。2016年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース修了。主な個展に「名無しのかたち」(武蔵野美術大学 gFAL, 2018年)など。